

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580152

研究課題名(和文) 東アジアにおける水産業の形成と変容

研究課題名(英文) The formation and the change of fisheries in East Asia.

研究代表者

麓 慎一 (FUMOTO, Shinichi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：30261259

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究目的は、東アジアにおける水産業の形成と変容を日本・中国・韓国のデータを利用して研究することであった。以下の研究成果があった。第一に、昆布漁では北海道で生産された昆布がどのように明治期に中国に流通していったのか、という点を解明できた。特に、昆布を売買するために立ち上げられた日本昆布会社について分析することができた。第二に、日本人による韓国近海でのオットセイ猟の意義を明らかにできた。日本がこのために韓国の海岸を租借しようとした活動が問題となった。ロシアは、日本のこの活動に対抗する措置を採った。以上のことから、水産業が国際政治や国際関係と密接に関連していたことを明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：The research purpose was to study the formation and the change of fisheries in East Asia using the data of Japan, China, and South Korea. There were the following results of research. In the first place, in the kelp gathering, I have solved the point how the sea tangle produced in Hokkaido circulated to China at the Meiji term. I was able to analyze especially about the Japanese sea tangle company started in order to deal in sea tangle. In the second place, I clarified that the fur seal in the sea near South Korean by Japanese people. The activity from which Japan tried to lease South Korean sea along the coast for this reason was a problem. Russia took the measure of opposing this activity of Japan. I was able to show clearly that fisheries were closely connected with international politics or international relations.

研究分野：日本史

キーワード：函館 長崎 釜山 昆布 オットセイ 水産業 塩 缶詰

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景と動機は、日本における水産業の研究が主に国内の水産業の展開とその市場の形成に止まっている現状を打開することにあります。水産業とその市場形成が、決して一国史的なものではなく、東アジア—日本・朝鮮・中国・ロシア極東—にあって相互補完的に展開していることを明らかにしたい、と考えました。一方で、中国や韓国にあってその水産業の展開と市場形成は、決して一国史的な視点では捉えられないにもかかわらず、水産業の国際的な進展とその市場形成に各国の研究が対応できていない、と考えたことが学術的な背景であり動機です。

二つの事例を挙げて研究の現状を説明するとともに本研究が期間内にどこまで明らかにしようとしたのかを説明します。

(1) 第一は、東アジアにおける昆布業の形成と変容の問題です。江戸時代における昆布は、清国への「俵物」として重要な輸出品でした。しかし、明治維新によって従来の海産物の輸出体制は崩壊し、新しい市場の形成が求められました。明治政府は、このために広業商会を立ち上げて昆布の生産地である北海道東部から函館を中継地として上海などにそれを輸出しました。

広業商会が上海の市場において日本の海産物を十分に売却できなかった理由の一つが、ロシアの沿海州地域から上海に輸出される昆布との競合でした。品質としては日本産の昆布がロシア産に勝っていたもののロシア産昆布はロシア大使ウランガリーの尽力によって清国への輸出税が日本よりも低廉に押さえられていました。

このように、中国・日本・ロシアの昆布業をめぐる税制の相違や慣習が新しい昆布市場の形成を阻害していました。この視点は、これまでアイヌの生業の一つであった昆布漁がどのように展開していったのか、という課題で行ってきた研究(挑戦的萌芽研究)の成果を発展させたものでした。

(2) 第二は、明太魚漁業とオットセイ猟業の東アジアにおける形成の問題です。これまで両者は、まったく関係のない水産業のように理解されてきました。しかし、環日本海地域において大規模に明太魚漁が実施されるようになったのは、報効義会という千島列島の開発を企図した組織が、その近海で実施した鱈漁を明治 30 年代に朝鮮半島の北部で企図したことが嚆矢でした。

報効義会は、この明太魚漁を実施する過程で、環日本海地域におけるオットセイ猟の可能性を見出しました。そこで報効義会は、明太魚漁からオットセイ猟に活動の中心を移します。この問題では、千島列島における日本の鱈漁とオットセイ猟の手法が、日本海地域に展開し、日本・朝鮮・ロシアにおいてそれらの水産業が展開する、と予想して研究を

開始しました。

以上の二点を中心に研究を推進して、東アジアにおける水産業の形成と変容の関係を明らかにすることが研究の背景と動機でした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東アジアにおける水産業の形成と変容の問題を、日本の史料だけではなく、中国・韓国・ロシアの史料を利用してマルチ・アーカイブな研究手法によって明らかにすることでした。そして日本が中核となって形成した東アジアにおける昆布漁・明太魚漁・オットセイ猟を中心に水産業の国際的な協業と対立の関係を解明することが目的でした。最も重要な点は、当該分野の研究を中国において推進している中国海洋大学と協同して実施することでした。

研究の対象とする時期は、幕末期から明治期としました。この時期に日本の水産業が東アジアにおいて大きく展開し、さらに国際的な諸条件によって変容する、と考えたからです。

研究の具体的な目的は以下の通りです。(1) 鹿島家文書(東京大学・北海道立文書館)の分析によって、昆布業の流過程を解明する。

特に、北海道庁などの関係官庁がどのように昆布を中国市場で流通させようとしたのか、という点を解明することが目的でした。(2) 日本に所蔵されている水産会の雑誌(『大日本水産会報』・『北水協会報告』など)の分析により、東アジアにおける水産業の協業と対立の関係を明らかにする。

この水産関係の雑誌の分析を開始した段階で、掲載されている関係記事が在外公館から外務省に送られてくる情報に依拠していることを理解するに至りました。それゆえ、『領事報告』なども分析の対象にして、水産雑誌の記事を補足することも目的の一つとしました。

(3) 日本語史料だけでなく中国の関税資料やロシアの文書館史料などマルチ・アーカイブな手法により、これまで見落とされていた水産業の国際的な連関を明らかにすることを目的としました。

とりわけ日本ではこれまでほとんど利用されることのなかったロシアの文書館史料の分析が、研究を大きく進展させてくれることを研究の初期の段階で理解し、第二の課題としてあげたオットセイ猟について、ロシア語史料を使って新しい事実を提示することを研究の目的の一つとしました。

(4) 中国および韓国の水産業に関係する研究者のネットワークを形成し、水産業の国際的な研究協力の体制を構築することを目的としました。この点では、中国海洋大学の研究者の協力を得て、新潟大学において研究会を開催し、その目的を達成できるようにしました。

以上の四点を具体的な目的として研究を推進しました。

3. 研究の方法

研究の方法についてどのような史料を分析したのか、という点を中心に記します。

(1) [昆布業について] 国内では中国の昆布市場の調査に深く関与した鹿島家の資料群と生産者(北海道)の史料を中心に分析しました。また、上海の海産物市場に対抗する煙台・香港・大連・天津などの商人についての史料を収集し分析しました。国外では、上海における海関史料の収集と分析を実施しました。

具体的には昆布業では大きく四つの史料群を調査分析しました。第一は、北海道立文書館・東京大学経済学部における海産物関係資料(鹿島家文書)の調査と分析です。これに関連して、鹿島家が活動した函館(昆布の輸出と華僑との対立)と根室・幕別・釧路(昆布の主要な生産地域)における関係資料の調査も実施しました。第二は、広業商会に關係する資料群と中国商人によってチャーターされたドイツ船の關係資料を水産關係の雑誌から発見することができました。

中国では、上海以外の地域に日本産とロシア産の昆布がどのように輸入され、競合していくのかを調査しました。中国における調査では中国海洋大学[青島]修斌教授の援助を受けて効率的に資料を収集できました。この過程で中国海洋大学のある山東半島における「塩」が東アジアの海産物の加工に使われていることを指摘され、この点についても若干ですが、文献などを収集することができました。

第三の水産關係の雑誌については、『大日本水産會報』と『北水協會報告』を網羅的に調査しました。『大日本水産會報』は、東京大学明治新聞雑誌文庫の目録を手掛かりに、北海道大学図書館などで調査を実施しました。

『大日本水産會報告』では「清国海産物貿易販路ノ景況」(59号)・「北海道産物長切昆布ノ商況」(83号)・「清国需用海産物ノ概況」(89号)など本研究に關係する雑誌記事を収集して分析しました。

『北水協會報告』については上海以外の地域において日本の昆布市場を開拓するために実施された調査報告(「北海道水産物清国販売実況」)など関連する資料が多数、掲載されていることを確認し、分析しました。

第四の新聞資料では、課題の水産業の拠点となった函館の『函館新聞』と長崎の『鎮西日報』から調査分析しました。これらの新聞については、国立国会図書館に所蔵されている部分から閲覧し、効率的に研究を推進しました。

具体的に大きな成果のあった『函館新聞』では「広業商会」(明治11年8月20日付)・「本港広業商会」(明治12年12月19日付)など広業商会に關する多数の記事を入手することができました。

(2) [明太魚漁業とオットセイ猟業について]

報效義會が明治30年代前半に明太魚漁を朝鮮近海で実施したあとに、九州地方および四国地方の漁民がそれを引き継ぐ形で明太魚漁を実施した経緯を調査しました。

この点でも水産關係の雑誌が大きく研究を進展させてくれました。具体的には「漁業權の拡張」(『大日本水産會報告』228号)・「朝鮮の明太魚漁」(『大日本水産會報告』230号)などです。

ロシアでは、ロシア国立海軍文書館を中心に日本海におけるオットセイ猟の監視を行うロシア太平洋艦隊の資料を収集しました。特に、ロシアの巡洋艦の報告書には、ラッコ猟やオットセイ猟の密猟を防ぐために採られた方策や活動が詳細に記載されていることを発見しました。

さらに、ロシア国立図書館において本研究に直接關係するロシアの雑誌「ベスチーニク・リープニプロミシュレイナスチ」(水産業集録)を収集して分析しました。

平成26年に新潟大学において研究会を実施して、中国および韓国の研究者と討議する場を設けました。この研究会には、申請者の麓慎一と日本漁業史の分野から田島佳也(神奈川大学)・東アジア史の分野から石川亮太(立命館大学)が参加しました。また、中国側の研究者については、研究協力者である中国海洋大学の修斌氏と選考し、韓国側の研究者については趙成国氏と選考して招聘することができました(具体的な内容は「4 研究成果」に記します)。

4. 研究成果

(1) 中国の山東省における漁業史料の調査を行えたのが大きな成果でした。特に中国海洋大学の研究者の協力を得て上海・營口についての税関史料を収集することができました。これらによってロシア産昆布の大連・上海への流入について新しい知見を得ることができました。

研究成果を「清国における海産物市場の形成と市場情報」と題して論文を上梓することができました。これは広業商会の崩壊に際して、北海道庁が中国(大連・上海・營口など)の昆布市場の調査を実施して、新たな水産業政策を立案するための情報収集の過程を鹿島万兵衛文書に依拠して検討した論考です。これにより北海道庁がロシア産昆布の流入状況を十分に把握した上で、新たな昆布市場の形成のための政策を立案していたことを明らかにできました。

(2) 平成26年10月4日に新潟大学においてワークショップを開催することができました。以下にその題名と概要を記します。

①麓慎一(研究代表者)は「近代日本における北洋漁業の展開と中国」と題して北洋漁業の加工に使われる塩の問題について報告しました。

②石川亮太（連携研究者）は「明治期の釜山水産会社について」と題して、釜山に設立された水産会社の動向を漁業関係の雑誌を使って報告しました。

③田島佳也（連携研究者）は「19世紀 近世北海道の輸出海産物（俵物・諸色）と中国」と題して近世における海産物流通について経済的な視点から報告しました。

④趙成国（研究協力者）は「中国昆布貿易資料について」と題して関税史料から日本の海産物がどのように中国国内に流通していったのか、という点について報告しました。

⑤修斌（研究協力者）は「北海道の海産物と中国」と題して、北海道の海産物が中国においてどのように捉えられていたのか、という点について報告しました。

⑥楊蕾は「第一世界大戦前後の日本汽船海運業」と題して、海産物の輸送などに必要な船舶の航路の形成過程について報告しました。

これにより連携研究者と海外の研究協力者の水産業についての問題関心を確認し、情報を共有することができました。とりわけ水産業を分析するに際して、その加工の問題も考察の対象にする必要があることを理解できました。具体的には缶詰が東アジアに普及する以前にあっては塩の確保が重要であることを理解するにいたりしました。

研究会の開催以降は、この研究会で課題となった点について分析を進めました。特に、以下の三点について研究を進展させました。

(1) 第一に、北海道の昆布の中国での流通について『領事報告』・『通商公報』などから関係史料を収集して分析しました（主に大正期）。

後者の『通商公報』では「海陸産物其他取扱商上海」（16号）・「上海に於ける海産物需用状況」（160号）など、日本産の昆布が中国市場でどのように受け入れられていたのか、という点を分析できる記事を収集することができました。

(2) 第二に、報効義会が明治30年代に明太魚漁を朝鮮近海で実施するために韓国の沿岸地域の租借を企図した時に、どのような問題が発生したのか、という点について史料を発見することができました。これまで知られていない事実であり、水産業の問題が政治史や国際関係史と綿密に関連していることを示す事例でした。

(3) 第三に、漁獲物の加工に使われる塩の生産と流通についての関係史料と先行研究を収集しました。中国の山東半島などの塩がどのように日本の水産物の加工に使われていたのか、という点を中心に考察を進めました。

この点については、新たな科学研究費を申請して研究を継続したい、と考えています。

以上の三点について史料の収集と分析を進めることができました。

研究成果の一部を「江戸時代の終わりに樺太を開拓した新潟県人松川弁之助について」

（2015年11月12日）と題して新潟県内の高校において発表しました。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①麓慎一「明治30年代中期における千島列島について」『新潟大学教育学部研究紀要』（審査無）7巻2号、2015、pp297～317。

<http://hdl.handle.net/10191/31972>

②麓慎一「報効艦隊の創設について」『環日本海研究年報』（審査有）21号 2014、pp19～40。 <http://hdl.handle.net/10191/27029>

〔学会発表〕（計9件）

①麓慎一「近代日本北洋漁業的展开与中国」2015年6月16日 中国海洋大学 文学新聞伝播学院研究会（中国 青島）

②麓慎一「世界史の中の函館 近代日本における函館の位置」2015年2月21日 はこだて外国人居留地研究会 函館市立図書館（函館）

③石川亮太「明治期の釜山水産会社について」2014年10月4日 「東アジアにおける水産業の形成と変容」研究会 新潟大学（新潟）

④楊蕾「第一世界大戦前後の日本汽船海運業」2014年10月4日 「東アジアにおける水産業の形成と変容」研究会 新潟大学（新潟）

⑤田島佳也「19世紀 近世北海道の輸出海産物（俵物・諸色）と中国」2014年10月4日 「東アジアにおける水産業の形成と変容」研究会 新潟大学（新潟）

⑥趙成国「中国昆布貿易資料について」2014年10月4日 「東アジアにおける水産業の形成と変容」研究会 新潟大学（新潟）

⑦修斌「北海道の海産物と中国」2014年10月4日 「東アジアにおける水産業の形成と変容」研究会 新潟大学（新潟）

⑧麓慎一「近代日本における北洋漁業の展開と中国」2014年10月4日 「東アジアにおける水産業の形成と変容」研究会 新潟大学（新潟）

⑨麓慎一「世界史のなかの新潟」2014年9月20日 新潟市主催（歴史講座 古資料が語る新潟の歴史） 新潟市万代市民会館（新潟）

〔図書〕（計1件）

①麓慎一「清国における海産物市場の形成と市場情報」『環東アジア地域の歴史と情報』（和泉書店）所収、2014、pp221～243。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

麓 慎一 (FUMOTO SHINICHI)

新潟大学 人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：30261259

(3) 連携研究者

田島 佳也 (TAJIMA YOSHIYA)

神奈川大学 経済学部・教授

研究者番号：40201610

石川 亮太 (ISHIKAWA RYOTA)

立命館大学 経営学部・教授

研究者番号：00363416

柴田 幹夫 (SHIBATA MIKIO)

新潟大学 経営戦略本部・准教授

研究者番号：30293244

(4) 研究協力者

趙 成国 (ZHAO CHENGGUO)

中国海洋大学 文学新聞伝播学院・准教授

修 斌 (XIU BIN)

中国海洋大学 文学新聞伝播学院・教授